②コミュニケーション能力育成とPISA型読解力の向上を目指して～読書へのアニマシオン～（青葉区・さつきが丘小学校）

執筆者
横浜市立さつきが丘小学校長
渡辺　正彦
教務主任
中川　智子

1　さつきが丘小学校を取り巻く環境

さつきが丘小学校は、青葉区の南に位置し、周辺は他地域より移り住んできた会社員家庭が多い住宅地です。人口の増加に伴い、つつじが丘小学校から分離独立、平成4年に開校しました。街が形成されてからは40年近くが経ち、自治会等の活動も定着していて「街」としての落ち着きがみられます。地域の方々は本校のことを「地元の学校」として見てくださり、全体的にとても協力的です。保護者も「教育」に対する関心が高く協力的で、様々な形で学校を支援してくださる保護者・地域ボランティアの人数は100名以上にも上ります。あたたかい街の方々に見守られ、子どもはのびのびと過ごしています。

2　10年前から「コミュニケーション能力育成」の研究をスタート

本校は開校以来、教育の改善に努め、平成7年度からは国語科を取り上げ、「楽しんで学習し、自分の思いをのびのびと表現できる子」「音声言語による表現力を高め、学び合って伸びてゆく子」を目指して研究を進めてきました。このような教育実践を通して子どもには、活動目的をもって学習に取り組み、多様な学習方法を選択しながら学び合う姿勢や、自分の思いを表現しようとする姿勢が見られるようになりました。平成9年度からはさらに「生活に生きる言語表現能力」を身につけ、他の人を思いやったり、協調したりしながら、共に生きる子どもを育てていきたいという課題のもとに、「音声言語によるコミュニケーション能力の育成」に取り組み始めました。

ちょうど社会に目を向ければ高度情報化、国際化、高齢化と、時代はめざましい変化を遂げており、それらに対応した教育の推進が強く求められ始めていました。21世紀に生きる子どもにはこのような、時代や社会の変化に対してグローバルな視点に立って全世界の人々と協調しながら、問題を発見し、課題を解決していく能力が求められていました。一方、子どもの生活では核家族化や少子化等から人間関係の希薄さや社会性の発達の未熟さが指摘されるようになりました。このような社会及び子ども自身の状況を踏まえながら、本校ではコミュニケーション能力の育成の実現にあたり、次の事項を大切にして研究をスタートさせました。

（1）より適切に情報を選択し、自分の意見を明確にしているか。

（2）他人の考えを共感的に受け止めようとしているか。

（3）心と心のふれあいや通じ合いのある、支持的な風土に満ちた学級経営、学校経営がなされているか。

3　横浜市の教育課程（国語科）研究協力校の指定を受ける

それまでの研究の成果から平成10年度に、横浜市教育委員会の教育課程（国語科）研究協力校として「コミュニケーション能力を育てる国語科学習」の主題のもとに新たなステップを踏み出しました。そして本校が目指しているコミュニケーション能力を次のように定義しました。

ア　対話と話し合いによって理解を深め、よりよい人間関係を形成する能力

イ　積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度

ウ　言語・非言語および図や写真などを用いて、自分の考えを相手に伝えたり、相手や場並びに目的に応じて、自分の考えを分かりやすく表現したりする能力

さらにコミュニケーションの本質を「話し手と聞き手との間の意思や感情の伝達と交流作用」とした上で、次の8つの力が発揮できたとき、コミュニケーション能力が具現化されたものと捉えることとしました。

①「相互交流することができる力」を基盤に据え、

②「共感することができる力」

③「自己主張できる力」

④「話し合いによって歩み寄ることができる力」

⑤「問題を解決することができる力」

⑥「質問することができる力」

⑦「他者に助けを求めたり、他者を助けたりすることができる力」

⑧「差別や人権についての意識を高めることができる力」

4　「コミュニケーション能力」を育てることは「生きる力」を育てること

これらの「コミュニケーションの8つの力」は「生きる力」そのものであるといえます。そこで本校では、「コミュニケーション能力の育成」を本校の特色として、すべての教育活動の柱とし、基礎基本の習得、基本的生活習慣の定着、主体的な学習活動と一体化させ、「生きる力を養う小学校教育」を機能させていきました。その結果、子どもから立ち上がってきた課題は他教科等との関連やインターネットなどを含めた情報教育活動などいわゆる「学習の総合化」へと向かっていきました。

図1

5 「コミュニケーション能力」を培うための様々な学習形態を体験させる

本校では低・中・高学年ごとに系統性を考えて様々な学習形態を習得していくようにしています。例えば、＜聞く・話す活動＞として、スピーチ、ショー&テル、ブックトーク、インタビュー、ストーリーテリング、パネルシアター、＜話し合う活動＞として対話、バズセッション、ロールプレイング、スキット、パネルディスカッション、ディベートなどです。また、構成的グループエンカウンターも取り入れ、友達や教師との人間関係のもち方を体験的に味わうことを通して自分のよさに気付いたり、相手のよさを心から理解したりできるようにしています。このエクササイズを通して「友達のよいところを知った。」「また、やってみたい。」などの感想が多く聞かれます。互いに理解しあえた集団の中で、子どもは思いや考えを伝え合い、安心した気持ちで学校生活を送れるようになります。

6 朝15分間の「さつきの時間」で「コミュニケーション能力」を鍛える

コミュニケーション能力は日常の積み上げにより確かな力となります。そこで「朝の会」や「帰りの会」でスピーチ、詩や物語の音読、歌唱などを行ったり、週1時間「コミュニケーションの時間」を設け、エンカウンターやきょうだい学級との交流（異学年交流）のほかディベート、インタビュー、感想交流、地域・保護者のボランティアによる読み聞かせなどを行ったりしました。現在では、火・水・木曜日の朝の15分間を「さつきの時間」と称して取り組んでいます。「さつきの時間」の年間計画も作り、それをもとに学年や学級の実態に合わせた取組がなされています。例えば、ある日の朝の活動を紹介しましょう。

2年生のあるクラスでは、5～6人の班ごとに、順番に一人ずつが文章を音読し、他の子どもがそれを聞く活動をしています。「話すこと・聞くこと」のめあてを始めに確認し、聞き終わったあと、よかった点を言ったり、アドバイスをしてあげたりしています。

4年生は、終わったばかりの宿泊体験学習について、内容や感想を3年生の前でスピ

図2　学習形態

学年		低学年	中学年	高学年
音声言語の形態	聞く・話す	スピーチ ショー&テル ブックトーク インタビュー ストーリーテリング	スピーチ ショー&テル ブックトーク インタビュー ストーリーテリング パネルシアター	スピーチ ショー&テル ブックトーク インタビュー ストーリーテリング パネルシアター
		読み聞かせ		
	話し合う	《二人》 対話・ペア学習	《小集団》 バズ・セッション ロールプレイング スキット	《学級・多人数》 パネル・ディスカッション ディベート 討論

ーチしています。1年先輩として3年生に予備知識を伝え、関心を高めるという目的のもと、学年やクラスをこえた交流がなされています。

6年生になると内容はさらに高度となり「雨の日の休み時間には教室でビデオを流したほうがいいか。」を論題とした討論会が行われています。肯定の立場と否定の立場、それぞれ数名のグループが意見を戦わせるディベートです。他の子どもが判定役となり、主張の納得度や意見の出し方などについて採点しています。

7 子どもの成果と新たに見えてきた課題とは？

研究の積み重ねにより、自分の学校はコミュニケーションを大切にしている学校だということを子ども自身が実感できるようになってきました。学級目標や学年目標を決めるときにもコミュニケーションの大切さを考えながら作り上げるようになりました。また話し合いによって互いに理解し合ったり、問題を解決したりするという経験を積み重ねることによりコミュニケーションの大切さに気づくことができました。課題として見えてきたことは、もっと問題解決的な学習を増やしたり、パソコンなどの情報機器を使った学習を工夫したりして、今すぐにでも「生きて働くコミュニケーション能力」を発揮できるようにしていくことです。さらには、自分のことを話す「プライベート」型のスピーチだけでなく、「パブリック」な場面でも、自分の考えをしっかりともち、自分の言葉で話すことができるようになってほしいということでした。そのためにはもっと本を読む子ども、本を読んで自分の考えをしっかりともつ子どもを育てる必要がありました。そのために導入したのが「読書へのアニマシオン」でした。

8 読書へのアニマシオンとは？

「読書へのアニマシオン」はスペインのモンセラ・サルトさんが開発して世界中に普及させているものです。「読書へのアニマシオン」を紹介してくださったのは、本校の研究を10年来、ご指導くださっている国立教育政策研究所教育課程研究センター総括研究官の有元秀文先生です。有元先生はモンセラさんの「読書へのアニマシオン」を日本でも普及させるために「子どもが必ず本好きになる16の方法・実践アニマシオン」という本も著しています。有元先生は「読書へのアニマシオン」の優れているところとして次の4点を挙げています。

①マニュアルがしっかりしていて、どんな人がやっても容易に子どもに読書の楽しさを伝えることができる。

②ゲームや遊びを通してどんなに読書嫌いな子どもでも読書を楽しませることができる。

③読んだことについて、話し合ったり自分の意見を発表したりするコミュニケーションの力を育てることができる。

④欧米で自分の意見を言うために最も大切にされる「批判的な読みの力」を育てることができる。

本校では各学年の発達段階にふさわしい「アニマシオンの作戦」とその作戦に合った本を選んで実践しています。

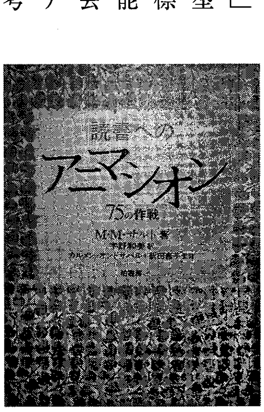
例えば、1年生にもできるのは作戦1「読み違えた読み聞かせ」です。同じ物語を2度読んで聞かせ、2度目に読むときに読み違えたところを子どもに気づかせる作戦。この作戦によって子どもはとても注意深く話が聞けるようになります。

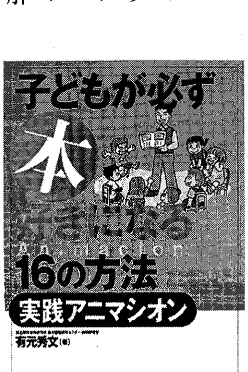
3年生では、作戦29「物語を語りましょう」を行っています。物語の読み聞かせの後で、質問に導かれながら子どもが物語を作り直す作戦です。この作戦によって子どもの集中力を高め、想像力を豊かにすることができます。

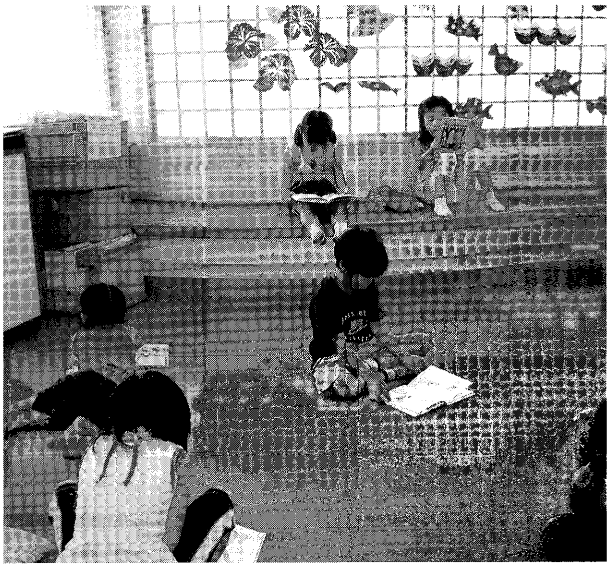
高学年ともなると作戦31「どうして？」ができます。読んできた本について、子どもがひとりずつ渡されたカードの質問に答えたり、意見交流をしたりすることで、物語を掘り下げて読むことができます。

9 「読書へのアニマシオン」はPISA型「読解力」を育てる

実はこの「読書へのアニマシオン」の作戦が、本好きの子どもを育てるだけでなく、今、日本の子どもに足りないと言われるPISA型「読解力」を育てることにもつながります。文部科学省から出された「読解力向上プログラム」の説明によると、PISA型「読解力」とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し熟考







する能力とあります。

日本の国語教育等で従来用いられてきた「読解力」と、PISA調査の「読解力」は意味するところは大きく異なるので、「読解力」とはせず、あえてPISA型「読解力」とよぶのです。PISA調査で日本の子どもは「テキストの解釈」「熟考・評価」とりわけ「自由記述（論述）」の問題を苦手としていることが明らかとなりました。PISA型「読解力」の課題が「読む力」にとどまらず、「書く力」や特に「考える力」と関連していることがわかりました。したがって、子ども達のPISA型「読解力」を向上させるためには、「考える力」を中核として、「読む力」「書く力」を総合的に高めていくことが重要であるということです。また前回のPISA調査（2000年）において読書習慣がある子どもほどPISA型「読解力」の得点が高い傾向にあることが明らかになっています。読書活動等を通じて言語についての知識や経験を深めることにより、子どもたちのPISA型「読解力」を支える基礎力を育成することも重要であるということです。

「読書へのアニマシオン」は、まず楽しい読書の経験を積み重ねることにより、本が好きになり、進んでいろいろな本を読むようになります。そして、読んだ本についてのクイズやゲームを楽しんだり、意見を交流したりすることにより、コミュニケーション能力を育てていきます。さらに深く考えながら読み、読み取ったことを伝え合うことにより、PISA型「読解力」を育てる基礎力をつけることができるのです。

10 これからの教育の重点戦略とさつきが丘小の戦略

文部科学省・教育委員会ではこれからの教育の重点戦略として、次の5つを掲げています。

戦略1 「学習指導要領の見直し」と「国語力の向上」
戦略2 「授業改善・教員研修の充実」
戦略3 学力調査の活用・改善等
戦略4 読書活動の支援充実
戦略5 読解力向上委員会（仮称）の取組

これらを受け本校では、「コミュニケーション能力」を包括した「国語力」の育成を学校教育全体の柱として今後も研究を積み重ねていきます。また、教師が「コミュニケーションスキル」や「読書へのアニマシオン」の方法を身につけるための研修を続けています。さらに「読書へのアニマシオン」で使用する本を1クラスの人数分そろえたり、アニマシオンにふさわしい本をそろえたりして計画的に図書の充実を図っています。

また、先ほどの「実践アニマシオン」の中での有元先生の分析によれば読解力1位のフィンランドや欧米では多くの教科で「プロジェクト型の学習」（生徒が課題を与えられてそのことについて本や雑誌・新聞・インターネットなどの図書資料や文字資料から情報を集めて、グループで討論したことをレポートに書いて発表して討論する学習形態）が行われているそうです。これからは、日本でも子どもがたくさん意見発表や討論できる時間を確保すること、たくさん読ませて意見発表や討論に多くの時間を割くこと、読んだことを根拠にして発言させる習慣を小学校からつけることが求められます。「読書へのアニマシオン」は今まで日本で行われてきた読書とちがい、遊びやゲームの要素を取り入れた、欧米型の楽しい「コミュニケーションのある集団読書」であり、PISA型「読解力」の基礎にもなります。本校ではこれからも、コミュニケーション能力とPISA型「読解力」の育成のためにも「読書へのアニマシオン」に取り組んでいきたいと考えています。そのためには、教師自身がもっと本を読むように心がけ、「読書へのアニマシオン」の様々な方法を身につけていくこと。また、地域・保護者の方々に「読書へのアニマシオン」についてさらに理解をしてもらえるように努め、学校だけでなく、家庭でも子どもがもっと本に親しめるようにしていきたいと考えています。